夕焼け通信 1310号　2021.6.14
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）　56

# 木幡智恵美

## 虫捕り（3）

大型連休に入った。学生時代にはめったに帰省しなかった長男が、就職してからは連休と盆に帰ってくるようになった。けれども、新型コロナ拡大による緊急事態宣言下、今年は無理だ。転勤したばかりの小田原で、元気にやっているか心配していたところ、珍しく向こうから電話してきた。会社の事務所として登録している二階建ての一軒家で、富士山を眺めていると話す口調は明るい。それから、近頃読破したドストエフスキーの「罪と罰」について話し出した。我が息子ながら、やはり不思議な人物だ。読書と言えば、我が子の中で、文庫本を取って読むのは長男だけだ。長女は文字よりも宙を行き交う言葉で、しゃべり出したら止まらない。二男ほど読み聞かせをした子はないのに、それが裏目に出た。本というのは、人に読んでもらうものという観念が定着してしまった。その点、虫好きだった長男は年長時から虫の図鑑を開き、「これは」「これは」と一つひとつ聞きまくり、ひらがなとカタカナを同時に覚えた。小学生になると、虫の図鑑だけでなく、ファーブル昆虫記などを一人で読むようになった。

さて、その長男に何となく雰囲気が似ている寛大、買ってもらったピカピカの自転車を、玉湯に行った際に見せてくれた。近くの公園まで散歩するのに、寛大は自転車にまたがって乗る練習をする。寛大も、長男と同様、動きが俊敏ではない。のっそりのっそりこいでいる。いや、ペダルを上にして脚を降ろして少し進み、反対のペダルを上にしてまた少し進むといった具合だ。公園に着き、狭い広場を二周してすっかりくたばってしまった。長男が一年生の時のこと。朝、布団から出てこない。起き上がれないという。川崎病の疑いで入院した際のことが思い出され、すぐに病院に連れて行くと、坐骨神経痛と診断された。その頃、体育は縄跳び。跳ぶ様子を見ていると、縄が足元に来てジャンプして越す際、かなり力んでいた。妙な力の掛け方で跳び続けているうちに腰の神経を痛めてしまったようだ。

帰り道、蝶が飛んでくると、「ババ、自転車押して帰って」と言って蝶を追いかける寛大。自転車に乗れるようになるのはいつのことだろう。



がらがら橋日記

# 宮森健次

## かたづけ6

はじめはそのあまりの量に、かたづけは一階までと決めていたが、一つ終えれば次が気になり、結局二階、物置と進んでいった。あらかた終えると今度は庭が気になってならないのだが、こればかりは自分の手というわけにいかず、業者に相談中だ。

昭和四十年前後に開発された新興住宅地の初期に建てた家である。それまで両親は、遠縁の離れに下宿していた。一日も早く移りたかったのだろう、転居当時の家は、水回りと二部屋のみで二階の内装などまだ手つかずだった。

「なんでー、新しい家がいいがねえ、って言ってもお前は帰る、帰るって言って聞かんだった。」

母はよくそんな思い出話をした。ずいぶん困らせたことだろうが、三歳の子にとっては、なじんだところがすべてで、新しいことなんて何の値打ちもなかった。でも、記憶に残るのは家族がちゃぶ台を囲む四畳半で、ぼくはそこが大好きだった。北向きの腰高窓の向こうには、柿の木の植わった裏庭と竹を組んだ垣根があり、その先は草むらが日を浴びて広がっていた。そこは、子どもたちの遊び場だったので、通り道にあたる竹垣は一カ所だけ下にたわんでいた。窓の下にはチロをつないでいた。開けるとシッコの臭いがして、勢いよく桟に前脚を乗せてくるのだった。

しばらくして、チロのいたあたりに母の仕事場を増築した。ミシンと作業台、それに鏡台とラジオに囲まれて、母はものすごく働いていた。庭はぐんと狭くなり、遊び場だった草むらには家が建ったが、それでもぼくの大好きな場所だった。

チロは、仕事場の隣に設えた物置に引っ越した。年を取って大人しくなり、物置と庭を行き来して一日過ごしていたが、一度母が外出から戻ってみると、鏡台の座布団に座り、鏡に映る自分を見ていた。チロが仕事場に上がることさえ想像できなかったので、母から聞いて驚いた。鏡台に向かって母が何をしているのか、ずっと気になっていたのだろうと二人で笑った。

母がそれほど懸命に働かなくてもよくなったころ、仕事場と物置を二間続きの和室にした。大きな座卓を入れたが、ほとんど使う機会もなく壁みたいにして縁側に置かれ、雪見障子を塞いでいた。庭はさらに狭くなり、四畳半はすっかり暗くなった。チロはいなくなり、ぼくは就職して家を離れた。

母が亡くなって籠城していた奥の部屋を座卓ごとかたづけた。父が亡くなって何もかもかたづけた。窓を開け放してがらんとした二間に寝転がってみる。風鈴が鳴った。気づいたのは、大好きな場所はずっとずっと前に失ったままだったのだ、ということだった。

**30代フリーター**　やあ、ジイさん。五輪開催を目指す政権に対し、コロナ分科会長の尾身茂が「普通はやらない」などと発言したことをめぐって、御用学者たちも五輪に反対せざるを得なくなったとか、政権は都合にいいときだけ専門家の話を聞くのか、といった声があがっている。

**年金生活者**　問題の本質はそこにはなく、政権や与党の「政治権力」と医師会や病院業界、専門家などの「医療権力」の対立が五輪をめぐって先鋭化しているとらえるべきだ。

　菅義偉に代表される「政治権力」はこれまで、コロナ対策で、分科会を代弁者とする「医療権力」に押されてきた。ＧｏＴｏキャンペーンで押し返そうとしたこともあったが頓挫した。ところが、五輪だけはおのれの意志を押し通そうとしている。ＩＯＣという「国際権力」が撤退を許さないからだ。どうせ中止にできないなら、少しでも観客を入れて盛り上がりをはかり、政権浮揚に利用したいと菅らは考えていると推察される。

**30代**　ＩＯＣはそんなに強い力を持っているのか。

**年金**　ＩＯＣは莫大な放映権料収入を各国の競技団体に分配し、その運営を支えている。財政力の乏しい団体はその分配なしにはやっていけない。もし日本政府が五輪中止を言い出そうものなら、ＩＯＣは日本の諸団体への分配をやめると言い出すかもしれない。それを恐れる政府は彼らに逆らえない。

　ＩＯＣの幹部らは東京五輪について「（緊急事態宣言下でも開催）する」（副会長ジョン・コーツ）とか、「菅首相が中止を求めたとしても、それは個人的な意見に過ぎない。大会は開催される」（元副会長ディック・パウンド）などと平然と言い放っている。

**30代**　医療界のほうはＩＯＣに遠慮しなければならない理由はない。

**年金**　これまで国民に外出の自粛を促し、イベントの中止、縮小、入場制限、無観客開催などを求めてきた「医療権力」としては五輪だけ例外にするわけにはいかない。でないと、権力としての自己否定につながる。「もし（五輪を）やるのであれば、規模をなるべく最小化して、管理体制をなるべく強くする。いまの状況で（五輪を）やるというのは、普通はない」と国会で発言した尾身茂は一貫している。急に政権への忖度をやめ、物申すようになったというわけではない。

　もとをただせば、政権が五輪だけをコロナ対策の例外扱いしようとしていることから始まったことだ。それも政権の主体的な選択というよりもＩＯＣを恐れてのことだ。「医療権力」対「政治権力」「国際権力」のせめぎ合いが続くなかで五輪は強行されるだろう。

**30代**　五輪をめぐる対立にも見られるように、コロナの対処法をめぐる見解の違いがイデオロギー的な対立を引き起こしている。

**年金**　私はそれを「コロナ左派」と「コロナ右派」の対立と呼んでいる。前者はゼロコロナを目指し、後者は経済への打撃の軽減を目指す。その背景には「医療権力」と「政治権力」のせめぎ合いがあり、左右の対立はそれを反映したものだ。

**30代**　科学的に判断し得るはずのコロナへの対処がイデオロギー対立を引き起こすのはなぜなんだ。

**年金**　自然科学上の知見が党派性を帯び、その違いが政治的な対立を引き起こす例はコロナに限らない。反原発派は左派・進歩派に多いし、原発容認派は右派・保守派に多い。原発への賛否はいまや科学的な知見の違いにとどまらず、それ自体が党派を分ける指標にさえなっている。環境問題にも同様のことが言える。

　コロナ左派とコロナ右派にせよ、反原発派と原発容認派にせよ、脱炭素派と温暖化懐疑派にせよ、両者に共通しているのは、ともに自然科学を主張のよりどころにしていることだ。つまり医学であり、原子力工学であり、地学や生物学だ。

　同じ対象に対する複数の異なる科学的知見の中から、自派の主張を裏づけるものを選んで、それだけを強調する。これはあらゆる対立に見られる現象であり、科学に限らず、さまざまな分野の知見が根拠として動員される。

**30代**　科学とイデオロギーは科学と宗教のようにいちばん遠い関係のひとつのように見えるが。

**年金**　科学がイデオロギー上の主張の根拠にされやすいのは、科学が信仰に近い信頼を人びとから集めているからだ。とりわけ人の命がかかわる場合それが顕著であり、原発事故や新型コロナで私たちはそれを目の当たりにしてきた。そうした状況のもとでは、自然科学の専門家の科学的な知見の表明も、当人の意図とはかかわりなく、政治的な党派性を帯びることを完全には免れることができない。

　科学的な知見の政治化は主として左派・進歩派から仕掛けられた。源流は啓蒙思想、理性信仰を掲げてフランス革命を主導したジャコバン派など当時の左派・進歩派にさかのぼる。それはやがて「主義」に「科学」の名を冠した「科学的社会主義」を標榜するマルクス主義に受け継がれ、ロシア革命のイデオロギーとなった。

　東西冷戦が東側の敗北に終わり、科学的社会主義が国家的な基盤を失ったあと、代わりに出てきたイデオロギーがエコロジーであり、反原発であり、ゼロコロナにほかならない。

ニュース日記　788

中村　礼治

# コロナをめぐる科学と権力とイデオロギー